

《資料》

北海道家庭学校第五代校長の著述の変遷の検討
—計量テキスト分析による経時的变化の抽出と意味づけ—

久 藏 孝 幸

目的

北海道にて百年余りの歴史を持つ児童自立支援施設北海道家庭学校において、その旧教護院時代の1969年から1997年の間、校長職を28年間勤めた谷昌恒氏の著述を検討する。そのことにより、①児童の自立支援に関わる専門家、専門職やその管理者による指導や運営の際の理念性の変化の検討と、また、②一人の社会福祉実践家としてのその経験の蓄積とともに生じうる人物史としての変化の過程の両者の検討を目指したい。以上のことを、客観性を担保した上での検討を行うために、試みに計量テキスト分析の手法を援用することで、その手法の活用可能性の確認を含む試論としたい。

北海道家庭学校についての文献としては、古くは創立者であるキリスト教社会事業家、留岡幸助による著作集や日記集などが遺されているし、また、留岡幸助の子でもあり第四代校長である教育学者、留岡清男による著作や遺文集などがある。その後、職員である藤田俊二（1979, 2001）や花島政三郎（1978, 1996）による、現場実践を踏まえた著作が公刊されている。それらの中では退所後の児童のその後の生活を追い、家庭学校での教育の成果と、また家庭学校の教育及び、社会の抱える課題として、近年の社会的養護のアフターケア論に通ずる提起をしている。また、近年の研究書としては二井（2010）のものがある。これは留岡幸助と北海道家庭学校を中心とした日本の感化教育史をまとめた著作である。

藤井（1992, 2003, 2007）は、留岡幸助の生涯、及びその後の家庭学校の歴史を引き継ぎ刻む第四代校長留岡清男の仕事をまとめ、さらに藤井（2014）において、第五代校長谷昌恒の著作を元に、谷その人の生活教育の思想と実践に迫っている。いわば藤井は、藤井の視点による家庭学校史とも言える複数の著作を精力的に公刊しているといえる。

その百年余りの北海道家庭学校の歴史の中で、谷は28年間もの長い期間を校長職として在職

をしていた。それは家庭学校史の中の四分の一の期間にも及ぶ長い年月であり、谷の存在自体が家庭学校の歴史の大きな一部分と言える。しかしながら、その谷の仕事をまとめようとしたものは前述の藤井(2014)の他は、cinii等の文献検索の範囲で入手できるものとしては八巻(2010)によるものだけである。決して資料が不足しているわけではなく、谷には多数の講演や著述があり、その幾つものが公刊されている。また谷は校長職の間、北海道家庭学校の機関誌であるひとむれの巻頭言を毎月著しており、それらは後に「ひとむれ」第一集から第九集として出版されている。これらの資料を踏まえて藤井(2014)では「ひとむれ」を多数引用しながら、控えめにも「主観に陥る危険性のあることを十分に弁えた上で」と述べながら谷の思想と実践について論考し整理しているものである。

筆者は藤井とは異なる方法論で、谷の仕事についての検討を試みる。「ひとむれ」にある家庭学校校長としての機関誌巻頭言への言葉を、機関誌が配布される職員や関連機関等と共有したい意味内容の言語化であるとするならば、この巻頭言は谷の思考の毎月の定点観測の資料であるともいえる。この毎月の語られた巻頭言を経年的に比較することで、谷昌恒の校長としての実践や理念性の変動または実践家としての個人史の変遷を読み取り得ると考える。同時に藤井の論考の客観性の部分を補完することを目標に含みつつ、本論では計量テキスト分析を援用した考察をし、谷の著述の理解の一助としたい。

計量テキスト分析とは、テキストの内容分析の手法の一つであり、過去には手作業で行われていたテキストの分析を、計算機のパワーを借りて行う方法である。現在のソフトウェア科学は日本語の文章を自動的に形態素、いわゆる名詞や動詞などの品詞に分かち書きをする能力を有している。これを用い形態素のレベルでテキストを分析することが可能となる。

そもそも膨大なテキストを手作業で分類することは、時間を要するし、また、その分類を意味的に行うとするならば、必然的に藤井の言う「主観に陥る」可能性を残し、場合によっては分析上の欠点となり考察の偏りとして残りうる。もちろん、意味的

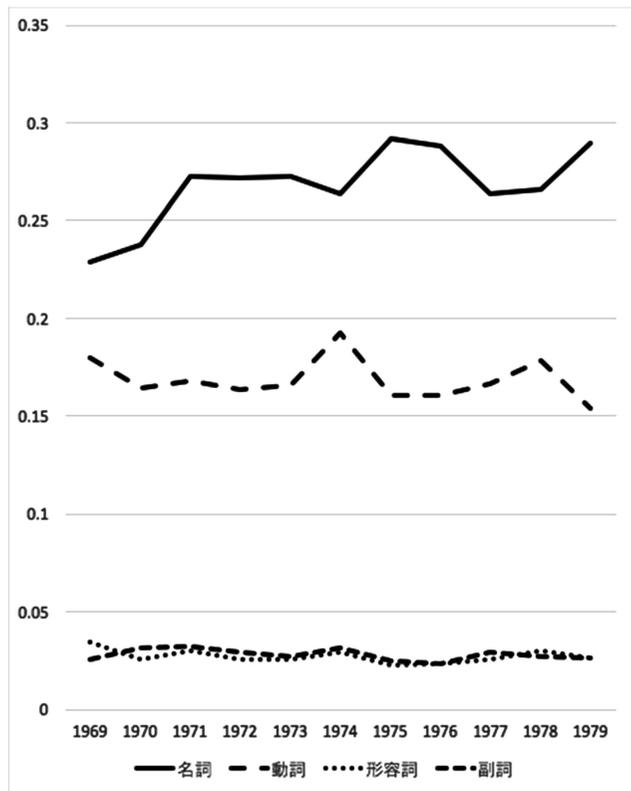


Fig.1 各品詞の出現頻度

集のテキストを電子化した。その後、これらから各種の施設の行事の際の式辞を転載したと考えられる文書を除く130文書を分析対象とした。

分析のためのソフトウェアとして、計量テキスト分析ソフトウェアKH coder [Ver.2b.31] (樋口, 2004, 2012) をMicrosoft社製Windows7上にて使用した。分析の前処理として、KH coderに内蔵する形態素解析ソフトウェア茶筌により形態素解析を行い、文書を品詞に分ち書きをし、さらに複合語の検出の後に改めて品詞の分類とカウントを行った。その際、個人名については複合語から除外した。

以上の処理の上で、これら130文書をそれぞれ年次毎にわけ、年次毎の各品詞の使用頻度を、各品詞数/全ての品詞数により比率として算出し、それらの時系列的变化を検討した。

また、内容語である名詞(ただし複合語含む)、動詞、形容詞、加えて副詞を中心に、これら使用されている語と使用年次を対応分析にてポジショニングを検討した。その際、分析に選択されうる語が60語以下にならないように最小出現数を調整した。

結果

130文書の形態素解析の結果、総抽出語16607語(のべ320285語)が抽出された。

各年毎の名詞、動詞、形容詞、副詞等の各品詞の出現頻度の時系列变化をFig.1に示す。1969年、1974年、1977～1978年に名詞の出現頻度と動詞の出現頻度が対応して増減する傾向が読み取れた。また、形容詞、副詞などの修飾語句には顕著な変動は認められなかった。また、各品詞について、応答変数を出現頻度、説明変数を年次として単回帰分析を行うことでトレンドを検討したところ、名詞についてのみ増加していた(出現頻度 = $-6.09686 + 0.0032352 * \text{年}$, $R^2 = 0.436$, 切片t値 = -2.52 , p値 = 0.0328 , 年の係数t値 = 2.64 , p値 = 0.0269)。

1969～1979年までの全期間に用いられている、名詞、動詞、形容詞、副詞について、各年次との対応分析を試みた結果を、Fig.1～4に示す。なお図上では分析に用いた60語中の、原点から遠い30語にのみ語のラベルを付し、年次にはそれぞれ年号のラベルを付している。

Fig.2及びFig.3の目視による評価では名詞、動詞については、1974年以前とそれ以降は、図表中の横軸(成分1)の原点を境に左右反対方向に布置されており、この年前後を境に「ひとむれ」上に用いられる名詞及び動詞の表現語句が変化していることがうかがわれた。反面、Fig.4及びFig.5の形容詞、副詞においては、近隣年次の小さなクラスターは認められるが、名詞及び動詞のようにある年次の前後での変化は、成分1軸及び成分2軸、あるいは斜交軸を仮定したとしても一本の軸で名詞や動詞の場合と同様の2群に線形分離することはできないと考えられた。

各軸の有する意味的な解釈は判然としないが、名詞の成分1軸については、原点を境に、子供、または少年→子ども、ないしは子どもたち、父親、母親→お父さん、お母さん、私ども→私たち、教師→先生、現代→世の中、などと、後年に平易で柔らかい表現が多くなっているものと考えられた。

考察

北海道家庭学校の歴史と照らし合わせるならば、1969年、1973年、1977年は家庭学校史に残る大きな出来事があった年である。一つは第四代校長であり、また創始者留岡幸助の子である留岡清男が78歳で亡くなったのが1977年2月である（藤井，2003）。また、1973年8月には「校長として『取り返しのつかない大きな過ち』」という事故が起きており（藤井，2003，谷，1974），その対応に追われ心身共に疲弊をしていた時期であろう。また、1969年も谷が校長として着任をした初年度という点で、これも大きな出来事があった年と言える。

この11年間の使用品詞の変動は、主に名詞及び動詞で顕著であり、それがあるのは1969年、1974年前後と1977年前後である。これらの大きな出来事との時期的対応はおそらく無意味ではなく、なんらかの谷の呻吟の表れではないかと考え、以下の考察を続ける。

一般になんらかのストレスを経験した後に、コーピングスキルや自己肯定的な概念を獲得し、または成長していくことをストレス関連成長（Stress Related Growth:SRG）とよぶ（Park, Cohen, & Murch, 1996）。Parkらは、これらストレス関連成長の予測因子として、宗教性、社会支援、再解釈他をあげている。また、心的外傷後成長（Post Traumatic Growth:PTG）の枠組みでは「出来事による影響があまりにも大きすぎてそれまでのスキーマではそれを解釈することができなくなった時」に前提として存在する認知的スキーマが、苦しい内省としての「もがき」を経て書き換えられることが外傷後成長の際に存在するとされる（Calhoun & Tedeschi, 2006）。では、谷にとってのこれらのような宗教性、社会支援、再解釈につながる「もがき」はいかなるものであったかを以下に記す。

谷は「ひとむれ」第四集に、事故後の1974年に記した文書を再掲し、その前文に「…10年の歳月が流れた。忘れられない、忘れてはいけない事故だと思い続けてきた…私の思念のすべてに、この時の痛恨が色濃く投影しているとも思う。」と記している。これは10年間の「もがき」と解することができるだろう。また、事故当時、理事長職であった留岡清男は『…心痛を少しでも軽くするように配慮して…』（藤井，2003）と、職員の身も案じている。このように谷や家庭学校を公私に支援する立場であり、かつ家庭学校の精神的支柱である留岡清男が亡くなるのが1977年である。また、宗教性という点については、谷はキリスト者であり、家庭学校そのものがキリスト教の教えを背景に有している。

出来事との時系列的な一致に加え、宗教性、社会支援、再解釈などがストレス関連成長の予測因子であるという知見に上記の事実を外挿的にあてはめれば、谷にはキリスト教、留岡清男や他の人々の支援、10年間の「もがき」等の要素がある中で、大きな出来事後の「もがき」に続き、なんらかの認知的スキーマの再構成があり、結果として文体に表れる名詞や動詞の種別頻度に変化が現れたということを想定することも可能である。もちろん事故後の精神的な落ち込みが、文体の変化に関わっていると考えることもできるが、事故前と事故後で二分される使用語の頻度の

違いに鑑みると、むしろ前者の、谷の人として、あるいは理念や思想性の質的な変化を考える方が妥当であろう。

興味深いことはその際、形容詞や副詞といった修飾語句には大きな変動が無い中で、主語述語として意味内容の中核となる名詞と動詞についての使用頻度が変わっていったと考えられることである。つまり意味内容を指し示す言葉遣いが変わり、しかしそれを修飾するための言葉の頻度はかわらない。そしてその言葉の変化とは、言葉の使い方の平易さ、より他者に理解されやすいような変化である。全期間をあわせた名詞の使用の漸増もあわせて推察すれば、一つ一つの言葉の正確な意味を持って物事を平易に伝えるようにしていった実践の11年と言えるかも知れない。

そしてそれが機関誌の中でも使用されているということに、文章にして世間に伝えたい意味内容の、その源泉である考え方や理念性の変化が背景にあることが想像される。これらをいいかえれば、職務上の大きな出来事を様々な支えの中で苦しくも生き延びる中で、現場実践者が、新たな職業的スキーマを発展させていったということが文意ではなく語からも読み取れそうである。

以上、計量テキスト分析による使用語の変化の抽出から、谷の実践的、理念的、または個人史的变化について推測し検討した。加えて、計量テキスト分析により個人史的变化を品詞の水準で検出する可能性があることを示した。

個人史研究、思想研究等に計量テキスト分析を援用しているものは文献検索の範囲では数は少なく、筆者の知る範囲では中畠(2014)のものだけであるが、一人の人間の表出の変化から、その背景にある思想性や感性の変化を推察できる手法として捉えるならば、臨床研究を含むさまざまな場面で利用ができると思われる。

一方で、本論では、ひとむれの巻頭言を、一人の人間の定点観測と見なすという仮定の下で経時的変化を検討した。しかしながら必ずしも谷の思想性を無作為に抽出したとは言えない。その点で文書選択法は再検討の余地がある。また、その時々に関心事がいくつかまとまった小クラスターとして分析に現れている節がみられるなど、経時的、連続的な変化のプロセス+その時々の一過性に関心事をあわせたデータになっていることが考えられ、これらを分離して分析することが可能かどうか、分析法のさらなる工夫が必要と考える。

参考文献

- 谷昌恒『ひとむれ 第一集』評論社, 1974
 谷昌恒『ひとむれ 第二集』評論社, 1977
 谷昌恒『ひとむれ 第三集』評論社, 1981
 谷昌恒『ひとむれ 第四集』評論社, 1983
 中野洋「人, 生活, 思想および公務を通して考えるホームヘルプ事業の創成: テキストマイニングを基にした原崎秀司の思想的特徴へのアプローチ」『介護福祉学』2014, 21(2), 113-121
 二井仁美『留岡幸助と家庭学校—近代日本感化教育史序説』不二出版, 2010
 花鳥政三郎『サナブチの子ら—北海道家庭学校の生活』評論社, 1978
 花鳥政三郎『10代施設ケア体験者の自立への試練—教護院・20歳までの軌跡』法政出版, 1996
 Park, C. L., Cohen, L. H., & Murch, R. L. 1996 Assessment and prediction of stress-related growth, *Journal of Personality*, 64, 71-105.
 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版, 2014
 樋口耕一「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』2004, 19(1), 101-115
 藤井常文『留岡幸助の生涯 福祉の国を創った男』法政出版, 1992
 藤井常文『北海道家庭学校と留岡清男 —創業者・留岡幸助を引き継いで』三学出版, 2003
 藤井常文『留岡幸助とベスタロッター—巣鴨家庭学校を舞台にした教育実験』三学出版, 2007
 藤井常文『谷昌恒とひとむれの子どもたち—北海道家庭学校の生活教育実践』三学出版, 2014
 藤田俊二『もう一つの少年期』晩聲社, 1979
 藤田俊二『まして人生が旅ならば —北海道家庭学校卒業生を訪ねて』教育史料出版会, 2001
 八巻正治「生活主義的支援観に基づく福祉支援実践論研究—谷昌恒の支援実践論について(1)—」『尚絅学院大学紀要』2010, 60, 79-91
 L. G. Calhoun & R. G. Tedeschi, 2006, *Handbook of Posttraumatic Growth —Research and Practice*, Lawrence Erlbaum Associates. (宅香菜子, 清水研監訳, 『心的外傷後成長ハンドブック 耐えがたい体験が人の心にもたらすもの』医学書院, 2014)

付記

谷先生の著作は、おそらく筆者より年長の、出版時の同時代に読んでいた様々な現場での実践家にとっては、ひとつの道標であり、またバイブルのように感じられるものであったように思う。筆者は一足もふた足も遅く谷先生の退職されたさらにその後に「ひとむれ」に出会っているのだが、筆者にとっても、臨床に必要なことが全て書かれているように感じられる書であった。しかし、何度も読みながら二つの点が次第に気掛かりになった。ひとつは、谷先生の言葉を正しく読んでいるのだろうか？ということであり、もう一つは、どのような経験と思索の過程で谷先生が谷先生としての成熟を果たしていったのかということであった。書物からなにかを得ることよりも谷先生その人を知りたくなったのである。

もとより、現場実践家が書物の中に単純に「正しい」答えを見つけたつもりになることは望ましくはないし、むしろそれぞれの読者が、一言半句の断片から自らの実践のヒントを見付けるなら、それで書物の役割は十分なのかもしれない。しかしそれ以上に、実践家である谷先生の生き様の変容そのものを知ることができるなら、現場で生き、成長しようとする者に役立つように考えた。今、テレビでは政権交代が決定したばかりのアメリカのオバマ大統領が、共和党への政権

委譲を前に、アメリカは直線ではなくジグザグに進歩してきたのだ、と演説している。谷先生の書物が、断片としての手本となるだけではなく、谷先生のジグザグそのものが手本になるのではあるまいか、と。

そのための方法として、計量テキスト分析により、客観的で確実な足場を探しながら読む試みを始めているが、文意よりも先に文章を切り刻むように扱う方法論は、谷先生も驚かれることだろうし、また、これまで谷先生とともに生きた方々には不愉快で不自然なことと感じられるだろう。筆者としては意味的解釈による理解の誤謬を少なくすべく、できる限り形式的な分析を試みた上で最後の段階で意味的理解と合成するならば、偏った理解を僅少にすることができると考えた上での試みだが、このような理由あってのこととは言え、バイブルを切り刻むことの不快を感じられる方には、この場を借りて、この行為をお詫びしておきたい。

(ひさくら たかゆき 札幌学院大学人文学部准教授 臨床心理学)